



作家  
元国際線乗務員  
**黒木安馬**

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。  
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 240

## 【令和】元号の名付け親

「つい書いてしまった推薦文」……。黒木氏からの手紙を受け取ったとき、私には推薦文を書く気持ちなど毛頭なかった。ところが、何気なく『出過ぎる杭は打ちにくい!』のゲラを読み出したのがいけなかった。書いてあることの卓抜さ、人生の要諦が心憎いほど見事に言い当てられている。しかも、表現が誠に簡潔である。これは日本伝統の俳句の呼吸だ。ずばり言って贅肉がついていない。もう一つ感心したのは、いつも言うことが具体的だ。たとえば、人生の目的の甘さを、タクシーに乗ったときの行先の明確さと比較するように、いささか勢いがよすぎるゾと思う反面、物事はすべて勢いダと思わせてしまう。よきかな、この勢い。ただそれを「出過ぎる」と言ってみる。30代にして著者がちょっとシャレなところもいい。(文学博士・中西進)

2020年夏、中西先生と再会するのは京都で一緒に食事をして以来30数年ぶりだった。90歳はどうに過ぎておられる御仁である。そのスーツ姿たるやカクシヤクとして背筋はシャンとして口調もハキハキと力強い。どう見ても60代後半にしか見えない。「先生が“令和”元号を創られたのを知って感動しました!」。歴史的な人物と目の前で独占対話していることに完全に舞い上がった。私の拙速な言葉がけに博士はニコリと穏やかに言われた。「元号は中西進という世俗の人間が決めるようなものではなく、天の声で決まるものですよ。考案者なんているはずがないでしょう」。その不動の天の摂理にも似た答えに圧倒されて妙に納得してしまう。「“令”は、形が整っていてうるわしい善の意味で、和の精神を世界に広めるのは次代日本人の務めです。“令和”は、初春令月、気淑風和と詠った大宰府長官・大伴旅人の“梅花の歌三十二首”の序文です。今まで漢籍から採られていたけど日本の元号ですから国書を典拠にしても良いでしょう。和の精神を世界に広めていく新たな時代にふさわしいものでしょう」。穏やかな口調の中にも理路整然とした納得力は流石に天皇陛下の「歌会始」の召人、万葉集の権威だ。これだけの説明がよどみなく出来る学者、やはり令

和の名付け親だと確信する。

先生との出会いは私の京都講演会後に哲学者の梅原猛さん、奈良薬師寺管長の安田暎胤さんたちと食事をしたときだった。のちに65歳で亡くなる奥様の紘子さんも一緒だった。中西先生は東京大学の博士、最初は高校教師で、教え子にエジプト考古学者の吉村作治さんなどがいる。筑波、帝塚山学院、京都市立芸術、大阪女子大学など多くの学長を歴任された。私が知己を得てからは、京都若王子にある梅原さんの自宅にお邪魔したり、一緒に龍安寺や薬師寺管長を訪ねて、色々と勉強させてもらった。中西先生から電話で、「フランスの文部大臣を日本の学界に招待するのに失礼が無いように政府補助の普通席からファーストクラスに上げてもらいたいのだが」との内容。私の乗務便であれば内密で出来るが、誰が担当乗務か分からない便では、そうは問屋が卸さない。安いチケットでUP-GRADE依頼をしてくる凶々しい御仁を断るのにかなり苦労した時代だった。ところが、差額は学会が払うのでファーストクラスの予約をしてほしいとのこと。JAL予約を通さないで“飛び職”の私を頼ってところが、ウブというか実直というか、微笑まじさに安堵したものだ。25歳の娘がダイビングで事故死し、最初の奥様を亡くして紘子さんと再婚されたのにまた死別。現在は30歳も年下の夫人と一緒にだとか……。波乱万丈の人生だが、勉学に勤しむ学者の方々は常に目が輝いている。2020年秋には、とうとう80歳を超えておられる薬師寺の安田長老を訪ねて奈良へ行ってきたが、30数年前に私がロンドンから出したお礼状のハガキを、わざわざ探してこられたのか見せてもらって感激した!中西、梅原、安田さんたちの実直さ、素直さ、行動力、記憶力と明朗さ、すべてにマメ。私も90歳を超しても、同じようにイブシ銀のごとく光を放ちながら生きるゾと、人生はかくありたいものだ痛感しきりだった。

まさに、「霧の中を行けば覚えざるに衣しめり、よき人に近づけば覚えざるによき人になるなり」道元。人生の宝となる出逢いは実に楽しいものだ。